

特集

今、ロシアを学ぶ

日時：2024年1月19日（金）9時00分～10時30分
場所：池袋キャンパス 16号館 2階 会議室

参加者：

（進行）飯島 寛之（全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部准教授）

蓮見 雄（経済学部教授）

山田 徹也（外国語教育研究センター特任准教授）

河本 和子（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師・総合系科目「世界の中のロシア」担当）

1. 全体趣旨

飯島（進行） 本学の多くの学部においてロシア語が言語Bの必修言語の一つになりましたが、ウクライナ侵攻を受け、教育研究におけるロシアの排除、あるいはロシアについて学ぶ学生の減少が危惧されています。しかし、世界経済や政治的にロシアを無視しては通れないということもあり、このような状況の中でロシアの言語や文化、社会を学び、改めてロシアを考えることの意味を教職員・学生に向けて発信できたらとの趣旨で、今年度の『大学教育研究フォーラム』は、「今、ロシアを学ぶ」というテーマを取り上げて座談会を企画しました。



飯島 寛之

『ユーラシア研究』（ユーラシア研究所）第61号の特集でヴォロンツォフ・ドミトリー氏が「日本人・ロシア人のお互いの誤解について」ということを書いていらっしゃいますが、私たちの多くは相互に「誤解」を持ち続けているのかもしれませんが。本日お集まりいただいた先生方は専門家なので違うと思いますが、われわれのような一般人や学生からすると、ロシアは、つい先ごろまで世界経済や世界政治の中で重要な一角を担うようになっていくと感じることが増える一方で、その実体については、旧ソ連時代から、客観的、あるいはアップロードされた情報を入手する術や機会がなかなかありません。文学や音楽などは、ロシアの良いイメージの形成につながっていると思いますが、しかし、それを包んでいる経済社会は、歴史的イメージがなかなか更新されないために、「暗い」「寒い」「怖い」というネガティブな感情を持たれ続けているのではないかと思います。

しかしそれは、一方的、あるいは情報更新していない私のような者の見方で、実際のロシアはもっと多様で、それを理解するにはきちんとその歴史的背景を理解することが

必要なのではないかと思います。そのあたりも踏まえてロシアに対する凝り固まった先入観を壊していただき、ロシアとどのように付き合っていけばいいのか、ロシアをどう見て、どう学んでいけばいいのかを先生方にご教示いただきたいと思います。まず河本先生からよろしくをお願いします。

2. ロシアの政治史

河本 和子
(全学共通カリキュラム運営センター兼任講師・総合系科目「世界の中のロシア」担当)

90年代以降のソ連解体からのロシア

本日の私の任務は、1992年以降のロシア政治史についてお話することだと理解しております。つまり、ソ連が解体して以降のロシア政治です。ご承知のように、1991年12月にソ連が解体され、ロシアはロシア連邦として独立を果たすことになりました。その後、資本主義国になろうと、経済改革が行われるわけです。このあたりは蓮見先生の方がお詳しいわけですが、改革の結果だけお伝えすると、ハイパーインフレーションが起き、失業者が大規模に発生しました。人々の生活は大変厳しいものになり、平均寿命、特に男性の平均寿命が低下し、治安も悪化して大変ひどい状態になったのです。うまく適応した一部の人だけが金持ちになり、彼らは新興財閥あるいはオリガルヒと呼ばれ、エリツィン政権と結び付いてさらに金持ちになっていくという経過をたどりました。また、中央・地方関係では、ソ連解体時の経緯や政治的な取引によって、政治的には非常に遠心的な構造が出現したというのが、エリツィン時代の大まかな特徴です。



河本 和子

これに立ち向かうことになったのがプーチンです。プーチンは、大学卒業後に治安警察に務め、ペレストロイカ期には東ドイツに駐在していました。帰ってきてからはサンクトペテルブルク市に勤務していたものの、お仕えしていた市長が選挙で敗北したために失業し、その後にモスクワにやってきました。モスクワでは大統領府第一副長官、治安機関の長官になり、その後首相へと、トントン拍子で出世していきます。そして、任期満了前に辞任を表明したエリツィン大統領に代わり、プーチンが大統領代行の職に就きました。半ば現職として2000年3月の大統領選挙に出馬し、1回目の投票で当選したわけです。

エリツィン政権下で影響力を持っていたオリガルヒが選挙を支援し、与党作りも行われました。ところが、当選後にプーチンは、ビジネスと政治の距離を適正に保つという

主張のもと、オリガルヒを政治の世界からどんどん追放していきます。世論は政治と癒着して利益を得ていたオリガルヒの政治的凋落を大歓迎したのです。エリツィン政権下で進んでいた中央・地方関係の遠心化もプーチンのもとで修正され、集権化が進みました。これにも世論の支持がありました。また 90 年代の末に、チェチェン独立派のテロに直面して内戦を戦った際にも、世論のバックアップがついています。経済的には 90 年代の混迷から、油価上昇の助けも得て脱却を果たすことができ、リーマン・ショックまでは大いに成長していきます。つまり政治経済にまたがって混乱した 90 年代を過去のものにした政治家として、プーチンは位置付けられているのです。

この後がなかなか厄介です。彼は 2 期大統領を務めた後、メドベージェフを後継に選び、自分は首相の座に就きます。権力を交代させるという観点からいえば、あまり褒められた行為ではありません。さらに、メドベージェフの任期が終わりに差しかかるころ、プーチンは 3 期目の出馬を宣言しました。憲法では「2 期連続を超えて大統領職に就けない」と定められていましたが、連続でないからいいとの解釈で 3 期目を目指したのです。このような解釈を押し通したことで、あからさまな政権のたらい回しが起きるわけですから、当然反発する有権者が多数出て、モスクワなどで大規模な反プーチンデモが起こりました。

この大規模なデモの経験から強権化が始まったと考える研究者は多いのですが、これだけではなく、前後に影響を及ぼしたと考えられる出来事があります。

一つ目が「カラー革命」と総称されるもので、旧ソ連圏で起きた、路上の抗議から発生した一連の政権奪取です。西側諸国からは「ピープルパワー」と称賛されましたが、プーチン政権から見ると正当とはいえない政権交代であり、それらを西側はどうしてあんなに称賛するのか、「西側が手を貸しているからに違いない」と陰謀論めいた理解が生じたと考えられます。実際、EU やアメリカから補助金をもらった、いわゆる民主化支援団体が支援していたのは間違いありません。ただし、人々が路上に出たのは援助団体に押されたからというのは言い過ぎで、政権に不満があるから路上に出たと考えるべきです。

二つ目が、西側と対立する分野が広がっていったことです。まずは、安全保障上のアメリカ極主義に対する批判です。安全保障の問題には、ミサイル防衛や NATO の拡大という問題もあります。特にウクライナとグルジアが NATO への加盟を望んだこと、そしてアメリカがそれを積極的に推し進めようとしたことは、ロシアからすると許し難い行為だったのです。それから、ロシアの内政についても、西側から「あれは民主主義ではない」という、より強い批判が入るようになりました。決定的だったのが 2014 年のクリミア併合で、違法な併合を非難する西側との間で亀裂が広がります。さらに、道徳観や価値観です。ジェンダー問題等について、西側との対立をずいぶんと強調するようになってきました。このように安全保障問題からはじまり、いろいろな場面で西側との対立が強調されるようになりました。

プーチン大統領に対する国民の支持率

他方で、有権者からプーチンへの支持は基本的に高いです。特にクリミア併合はプーチンの支持率を高め、2018年の夏までのおよそ4年以上にわたり圧倒的に高い支持率を誇ることになりました。2018年夏の年金受給開始年齢引き上げによって支持率は下がりましたが、それでも6割はあります。選挙が公正に行われているかは怪しいものですが、とはいえ、テレビなどでよく紹介される「票が操作されている」ということよりは、野党が活動しにくく、与党有利な環境が作られていることが公正さを損なっている主たる要因だろうと思います。

こうした中で、反対派への締め付けはものすごく露骨になっており、政権を維持するためだけであれば全く必要ないくらいの弾圧をしています。特に有名なのが、汚職追及運動で知られたアレクセイ・ナワリヌイという人物です。毒を盛られたことでニュースになったので、よく知られていると思います（追記：ナワリヌイ氏は2024年2月16日に収監先の刑務所で死亡したと発表された）。

それからナショナリスティックな面も出てくるようになり、ロシア人中心主義と思われるような言説がプーチンからも出てきています。しかも、そのロシア人というのは、民族的ロシア人だけではなく、ウクライナ人やベラルーシ人も含む、かつてのルーシと同義と解し得るものです。特に、2021年にプーチンが発表した「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という、非常に都合良く歴史を使った論文と称される文書から、東スラブの3民族（ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人）は一体との主張を読み取れます。

ウクライナ戦争が起こった背景

最後に、ウクライナ戦争はなぜ起こったかについて考えなければなりません。これは、今後の研究にお任せするしかないくらい、よく分からないことが多いように思います。大きな背景としては、冷戦後の西側との陣取り合戦でロシアが劣勢に立たされている、少なくともロシア側がそのように理解していることが挙げられます。ロシアにとって、ウクライナは「取られてはならないところ」なのです。かつては同じ国の国民同士として話し合える関係でしたし、ロシアはウクライナを懐柔する努力もかなりしてきたと思います。もちろん圧力もかけてきましたが。

しかしながら、クリミア併合以降は話が変わり、懐柔して引き留めるより、取れる時に取れるものを取るという局面が強くなっているように思います。それでも、2014年以降のウクライナ東部での分離運動では、戦闘が起きたドンバスまでは取ろうとせず、ドンバスに自立性を与えることによって、ウクライナの内側からNATO加盟を阻止してもらいたいという希望を持っていたように見えます。これは「ミンスク2」という停戦のための約束に含まれた条項が可能にする話であり、ミンスク2があるからウクライ

ナへの全面侵攻はないと多くの人は考えていて、私もそのように思っていました。振り返ってみれば、ロシアもウクライナもミンスク2に既に冷淡になっていたのだと思わざるを得ません。NATO不拡大についても米口間での交渉はうまくいかず、結局、ロシアはウクライナに対する全面侵攻を開始しました。

西側との経済的なつながりが戦争を抑止すると考え、リベラルな経済秩序で戦争を阻むという、理想主義的な話が唱えられる向きもありました。実際に、ロシアの最大の取引相手はヨーロッパなので、そこを敵に回すのは得策でないことは分かっています。それでも戦争に踏み切ったわけです。そこには二つの可能性があります。一つは、ヨーロッパを捨ててでも得たいものがあったということです。言い換えれば、既存の国際秩序は、ロシアにとってはそこまで死活的に重要ではなかったと考えることができます。もう一つは、戦争の見通しが非常に甘かったということです。数日でロシアの勝利に終わるので、西側が新たな「現実」を受け入れるだろうと見立て、軍事的な圧力をかければウクライナがすぐに折れると思って開戦したとも考えられます。現在も戦争は継続中で、今後しばらくは停戦の見込みがないと思います。

3. 世界経済におけるロシア

蓮見 雄 (経済学部教授)

進まないロシアへの理解

河本先生のお話は非常に分かりやすく、的確に全体の概要を説明してくださったと思います。ですが、ロシアに関する予備知識のない方からすると、おそらく難しくてよく分からないように思います。なぜそのようなことを申し上げるかを、自己紹介も兼ねてお話しさせていただきます。

私は立教大学の経済学部で世界経済論と国際経済論を教えています。実は授業でロシアに触れることはほとんどありません。それは、他に教えなければならぬことがあってできないのです。私の個人的な経歴でいうと、大学時代に曲がりなりにもロシア語を学び、大学院の修士課程の時にロシア経済について研究しました。その後、今のロシア NIS 経済研究所で3年ほどお世話になった後、大学に移りました。ですが、ソ連の崩壊とほぼ同時にロシア研究をやめました。その理由の一つは、ウィンストン・チャーチルも「ロシアは謎の中の謎に包まれた謎である」と言っていますけれども、私も正直よく分からなかったのです。自分の能力では無理だと思うとともに、ソ連型の経済を続けていけば国が滅び、その後の展望はしばらく開かれまいだろうと考えていました。90年代とい



蓮見 雄

うのは、先ほど河本先生が説明してくださった通り大変な時期でしたので、私には手に負えないというのが一つの判断でした。

もう一つは、大学に移った時の担当科目がヨーロッパ経済だったからです。東の共産圏が崩壊していくのに対し、西ヨーロッパが急速に統合していく状況をととても不思議に思っていました。なぜそんなことをお話するかというと、私の心の中には二つの世界があるからなのです。

30代の頃にはすでにロシア研究をやめて、独学でEU経済の研究をしていました。EU研究の世界で認められるようになった時に感じたのは、EU学会で話をしても、インテリである皆さんでさえ、ロシアに関しては基本的に「寒い」「怖い」というイメージしかなく、それ以上の具体的な情報はほとんど共有されていないのです。これには本当に愕然としました。先ほど、河本先生の話が難しいと失礼な言い方をしてしまいましたが、多少なりともロシアに関する基礎知識がある方にとっては、とても分かりやすくして良い説明でした。ところが、基礎知識がない方にとっては全く分からないということ、私は肌身で感じてきています。

他方で、ロシア・東欧学会に行くとEUのことが全く分からないのです。要するに、冷戦の壁がなくなったはずなのに、私たちの心の壁、認識の壁は全然崩れていなくて、むしろ強固になっているようにさえ感じます。ポスト冷戦は、精神世界では起こらなかったのではないと思うくらいです。ロシアのロジックとEUのロジックは違うものなので、両方同時に研究していると自分の心が張り裂けそうになってとても辛いのですが、それによって違うものが共存していることが分かるのです。

2009年頃、ロシアが崩壊してから20年も経っていない頃ですが、私はようやくEUについてそれなりの研究ができるようになった時、今お話ししたように、ロシアへの理解があまりにもなさ過ぎることに危機感を抱きました。そういう気持ちもあって、先ほど皆さんにお配りした『ユーラシア研究』などを発行しているユーラシア研究所に関わるようになり、十何年も事務局長をやっています。それにより、ロシアに関する研究者の方々と知り合うことができ、ロシアを忘れずにいられたことは良かったと思っています。世界経済を見ていく時に非常に多様な視点を与えてくれるところは、ロシアを完全に捨てなくて良かったという、一番大きな思いです。

ロシア経済の変化

本題のロシア経済についてお話しすると、世界経済の中におけるロシアというのは、実質GDPが3%くらいですから、たいしたことはありません。ソ連が崩壊した時はまだ5~6%あり、中国と同じくらいでした。ところが現在では、中国は人口でロシアの9倍、GDPは8倍です。軍事予算も中国はロシアの2倍に変わってきています。

実は、中国の存在とロシアの問題はものすごく深く関わっていて、これからますます重要になることを知ってほしいと思います。まず、ロシアという国は、GDPは少ない

けれども石油、天然ガスという化石燃料、それから金属鉱物資源が豊富です。脱炭素といわれる中で、再生可能エネルギー、あるいはEVに必要な金属鉱物資源は中国が一番豊富ですが、ロシアもたくさん持っているのです。それから、これもあまり知られていませんが、ロシアは非常に多くの森林を持っている国です。針葉樹林なのでCO₂の吸収量は少ないものの、全体で見れば多くのCO₂を吸収できるので、意外なことにヨーロッパでもクリーンな国なのです。

このように、自然資源がものすごく豊かな国であるとともに、普通の途上国と違う点は、航空宇宙産業や原子力などが発達していることです。おまけに農業大国として復活していることから、食料にも困りません。このようにポテンシャルは非常に高いのです。

それから、ユーラシアのど真ん中に日本の45倍もの面積があります。われわれは中国やアメリカが大きいと思っていますけれども、中国やアメリカは日本の25倍くらいですから、それよりもはるかに大きい国です。それが何を意味するかというと、世界のど真ん中、何よりもヨーロッパとアジアをつなぐ場所にあるという、地政学的な意味でも非常に面白い国なのです。

ロシア経済は、つい最近まで、500年にわたってヨーロッパの技術に依存してきました。それと同時に、少し言い過ぎかもしれませんが、ロシア国家の存亡の危機はほとんどが西から来ていました。十字軍もそうでしたし、あまり知られていませんが、ポーランドはモスクワを占領したことがあります。それから、ナチス・ドイツの問題やナポレオンなどもそうです。ですから、「脅威は常に西から来る」というのがロシアの感覚です。しかも、西側の人は過小評価していますが、第二次世界大戦では2,700万人も死んだといわれており、1940年代のロシアの記憶はとても重いものだと思います。そのロシアが今回のウクライナ侵攻に至ったということは、経済的には500年間お世話になったEUと袂を分かつということの意味するのです。

資源大国といわれるロシアの輸出先は、ほとんどがヨーロッパでした。今でもある程度は輸出しているものの、今回の件でヨーロッパには輸出できなくなってしまいました。また、先端技術もほぼ西ヨーロッパに依存していましたが、今はほとんど止まっています。10年前は、半導体や高度な精密機器をほぼドイツから買っていたのに、今では中国から買っているのです。ヨーロッパの物よりも精度が劣る部分があるので代替はしてはいませんが、500年間で初めてロシアはヨーロッパ以外で技術協力する相手を見つけたことが、今回の大事件なのです。

世界経済の中心は大西洋からアジア・太平洋へ

この20年くらいの間には世界経済に何が起こってきたかという、要するに大西洋からアジア・太平洋へと世界経済の中心が変わってきているわけです。1980年代には、G7が世界経済の8割以上ありましたが、現在は半分くらいに落ちています。BRICSというグループを集めると、G7より大きくなっています。

対ロシア経済制裁について、日本では世界中がロシアを制裁しているように報道されていますけれども、そんなことはありません。経済制裁をしているのは G7 と EU の国、日本やカナダくらいであって、大半の国はロシア支持ではないけれども「ロシアとの経済関係は是々非々でお付き合いします」という立場をとっています。これは、とても大きな時代の変化です。つまり、新興国の経済力が高まったことで、欧米に言われても「いや、うちにはうちの利害がありますから」と、自国の国益優先で行動できるようになり、結果的にロシアを下支えしているのです。これは善悪の問題ではなくて、今はそういう多極化の時代になってきているということです。そして、好むと好まざるとにかかわらず、ロシアは中国と協力するしかないという状況なのです。ご存じの通り、中国もアメリカと揉めていますので、当然中国もロシアと協力するしかなく、二つの国を追い込んでしまっているのが、今の経済制裁の実情です。

そうすると当然、日本にも関わってきます。日本は欧米と民主主義的な価値観で一致しているという部分は重要ですが、同時に経済的には完全に東アジアの分業の中に組み込まれており、中国との分業なしに日本経済は成立しません。そうすると、ロシアと中国が近づくのは他人事ではなく、われわれ自身の問題にならざるを得ないのです。良い悪いではなく、ロシアは何を考え、どのような原理で行動しているのかを、冷静かつ客観的なデータで確認しなければならない時代が来たのです。

その意味において、ウクライナ危機という問題が、ロシアの「東方シフト」といいますが、ロシアがアジアに入ってくることを加速しているのです。そして、世界経済全体で見ると、今まではロシアの資源はヨーロッパ経済を支えていましたが、これからはアジアの経済を下支えするようになるわけです。そのような大きな変化の中にあることを考えた時に、やはりロシアの動きを冷静に見ることはとても大事だと考えています。

4. ロシアの民族・文化への理解

山田 徹也（外国語教育研究センター特任准教授）

多民族国家としてのロシア

ロシアという国について授業で話す機会がありますが、そのような時、確かに蓮見先生がおっしゃっていたように、学生たちはロシアをロシアとしか思っていません。つまり、「ロシア人のイメージは？」というアンケートをすると、「金髪碧眼」「肌が白い」というイメージしかないのです。しかし、実際のロシア人の髪の色は茶色や栗色が多いので間違っていますし、ステレオタイプの白人のイメージではおかしいと分かります。



山田 徹也

ロシアという国は、8割がロシア人で、2割は少数民族の人たちで、ロシア人の次に多いタタール人が531万、バシキール人151万人です。また随分と減ってきてはいますが、全部で130余りの言語があるとされています。ですから、やはりロシアのいろいろなことを知ろうという時には、どうしてもロシア語が必要になってくると思います。

例えば、私はシベリアの調査でナナイ民族の方たちと会いに行ったことがあります。黒澤明監督の映画『デルス・ウザーラ』では「ゴリド」という名前が出ていますので、もしかしたらゴリドという昔の名前の方をご存じの方もいるかもしれません。そのナナイの人たちは、ロシア人と同じような考え方をしているのか、ということです。ウクライナ侵攻よりもかなり前に調査に行ったものですから、今の彼らがどのような考え方になっているかは分かりませんが、その当時は、ソ連時代にナナイ人としてのアイデンティティを無理やり奪われた経験から、ロシア人に対してあまり良い感覚は持っていませんでした。「ロシアの中の少数民族の調査にどうして日本人が行くのか?」とよく言われますが、実は少数民族のナナイ人のところにロシア人が行ってもあまり歓迎されず、むしろ外国人の方がいいことがあるわけです。ですから私は、ウクライナ侵攻の前から、ロシアの隣で地理的にも一番近い日本人が、ロシアについて勉強したり、積極的に関わったりしていくべきなのではないかと思っていました。

そのことを学生たちに話しても、「それでも日本とあまり関係のない国だね」などと思われたりするのですが、探せば共通点はいろいろあって、知られていないだけだと思っています。例えば、大阪の「ビリケンさん」ですけれども、少し調べたところ、フローレンス・プレッツという方が、当時のアメリカ大統領の愛称であるビリーから名付けたもので、それがなぜかいろいろな国々で幸福の神様として知られるようになったそうです。実は、ロシアのチュクチという所では、ビリケンではなく「ペリケン」という名前の神様が信仰されていて、守り神のようにその像を持っていると良いといわれています。そういった共通性は、探せばもっと見つかると思いますから、ぜひやってもらいたいと思います。

ナショナリズムと伝統的な民衆文化の台頭

ロシアを土台にして考えると、最近ではネオペイガニズム（復興異教主義）という運動が見られます。これは、キリスト教よりも前に、ロシア人やウクライナ人の祖先のルーシ人という人たちが信仰していた宗教を復活させようというものです。ただし、キリスト教以前にロシア人、ウクライナ人には文字がなかったものですから、そのような宗教を復興・復活させようとしても、ほぼ妄想の類になってしまいます。

私としては、ウクライナとロシアの仲が悪くなっていった原因の一つには、そのようなナショナリズムがあるように感じています。キリスト教以前の異教と呼ばれているような精霊信仰、あるいは昔の神様の信仰に対する興味が浮かんだ時に、ウクライナの人

は「そういった伝統的なものはウクライナのものだ」と考えるわけです。むしろ、10世紀頃にできたと言われるキエフルーシ（キエフ公国）の歴史からすると、ロシアというのは辺境の地で、日本でいえば、北海道や東北の人たちが京都の文化を「俺たちのものだ」と言っているように聞こえるものですから、ウクライナからするとあまり面白くないわけです。しかも、世界的に見ると、ロシアよりウクライナの方が格下というか、兄弟でいうところの弟みたいな扱い方をされることも非常に面白くないのだと思います。21世紀に入り、ウクライナとロシアにおいて、そのようなナショナリズム的なものと民衆文化における伝統的な文化が復活してきたことが、今回のウクライナ侵攻の原因の一つではないかと考えています。

英語だけでなく第二言語を学ぶ意義

話がずれてしまいますけれども、ロシア語を学び、あるいは研究をしている方々の中には、「ロシアに行けないと研究を進められない」「留学できないならロシア語を勉強する意味がない」と考える方もいらっしゃると思います。もちろん、それに関して全部反対、反論できるものではありませんけれど、例えばロシア語はロシアだけではなく、ウクライナの東の方でも使われています。ウクライナ侵攻でポーランドに避難された方とボランティアで話す中で、「ウクライナ語よりロシア語を使うことがあった」というお話も聞きました。中央アジアのカザフスタンやキルギスタンといった国々でも、ロシア語が公用語として使われています。大学でロシア語を教える私の立場としては、そういうことも考えてもらい、少しでもロシア語を選んでもらえればうれしいです。

研究分野においても、ロシアから中国に移住した人たちについて研究することも考えられると思います。また、旧ソ連は昔からデータ収集を怠らず、非常に大きなデータベースを持っています。しかし、それらは今まであまり活用されていません。先ほどの連見先生のお話にあった「資源」とはまた違いますが、旧ソ連の国々や中国、あるいは日本について知ろうとした時に、ソ連時代の資料を見ていくのもいいのではないかと思います。新しい視点を得ようとする時に、英語だけではなく、ロシア語が果たす役割はこれから広がっていくべきではないかと考えています。

5. 意見交換

今、ロシア語を学ぶ意義と今後の展望

飯島 それぞれの観点からご報告ありがとうございました。今のご報告を踏まえ、「今、ロシアを学ぶ」という本日のテーマについて、意見交換をさせていただきたいと思いません。

連見先生から経済の側面から、今のロシアは過去500年とは少し違った動きをして

いるというご報告をいただきました。河本先生は、国際政治におけるロシアの変化についていかがお考えでしょうか。

河本 長期的に見ますと、ロシアは過去何百年にもわたって領土を広げてきて、旧ソ連地域というのはロシア帝国をほぼ継承したものです。ポーランドやフィンランドは外れていますけれども、ほぼ継承し、基本的に領土は拡大する一方の国でした。1991年のソ連解体によって、ロシアはここ数百年で初めて領土の縮小、しかも大幅な縮小を経験したことになります。このことは、西側に入るために重荷を振り捨て、自分たちだけ繁栄しようという発想の一部のロシアの政治家にとっては合理的でしたけれども、そうではない人たちからすれば、故郷を失うことと変わりません。パワーという点からいっても、領土を失って良いことはなさそうに思えるわけです。そのような欠損感、欠落感はあると思います。

国際政治的には、先ほど蓮見先生がおっしゃった「精神的な冷戦が終わってない」ということは確かにあると思います。ロシアの人たちが持っている外国に対するイメージは、冷戦期よりも90年代に劇的に悪化しています。ソ連時代は、アメリカの労働者は連帯すべき相手であり、アメリカの資本家が敵でした。しかし、ソ連が解体して経済的におかしくなった時期に、アメリカやヨーロッパからたくさんの山師もどきの人たちが入ってきて、ロシアの大事な財産をかすめ取っていくように見えたわけです。このように、外国人のイメージがとても悪くなったのが90年代の一般的な傾向であり、これに90年代末のユーゴスラビア空爆が拍車をかけたと思います。非常にアグレッシブな西側像が、そこで提示されてしまったのだと思います。

他方で、ヨーロッパ文化に対する憧れの念も強くあります。世論調査を見ると、ヨーロッパ文化に対する肯定的な考えを持つ人は過半数をはるかに超えています。やはり親近感はあるのだと思います。ただし今は、国際政治上、あるいは政治経済秩序上のプライオリティーは中国にありますので、エリート層は中国とより関係を深めたいと考えていると思います。とはいえ、文化的にはなおもキリスト教が主流ですし、伝統的にヨーロッパにより親近感を持ちやすかったわけです。「危機は西から」というお話でしたけれど、文明も西から来ているところが、ロシア史においてはあると思います。

蓮見 河本先生の90年代のロシアにおける西側のイメージのお話は、経済的にも事実の部分があります。市場経済化がIMFの主導のもとで行われたため、簡単にいうと、泳ぐ経験も訓練もない状態で世界経済の海に投げ込まれたようなものです。その結果、ロシアは資源しかない国になってしまいました。昔はいろいろな機械工業製品を作ることができたのですが、何の準備もないままに全てオープンで自由になった結果、比較優位といえば比較優位なのですが、売れるものが資源しかなくなってしまいました。後に資源価格が上がったことから「資源大国」と言われるようになりましたが、好きで資源

大国になったわけではないのです。しかも、資源しか残らなかったが故に、そこがお金の源泉になってしまい、結果的に政治体制としても独裁になりやすくなってしまいました。そういう意味では、ソ連の崩壊と西側の対応は、客観的にはつながっている部分があります。

もう一つ、河本先生がおっしゃった中でとても重要なのは、初めて膨大な領土を失ったことの意味です。基本的にロシアの安全保障観は、単に領土を拡大したのではなくて、恐怖から領土を拡大してきた部分があります。たくさんの国境を持ち、たくさんの民族がいる国ですから、国境近くで何かが起こると、すぐに自分たちの国の脅威になってしまうという認識があります。良いか悪いかはともかく、これがロシアの安全保障観です。外国であっても、近隣の国に関しては特権的な利害を持っているのが旧ソ連地域であり、その一番大事な部分がウクライナだったわけです。

欧米流の考え方では「またロシア帝国復活のたくらみをしているのか」と評価されますが、ロシアからしてみれば、自分の国を守るためにはそうせざるを得ない、という認識なのです。それが正しいかどうかはともかく、自分たちの国家主権の枠組みで考える西側の安全保障観と、ロシアが持っている安全保障観は違うわけです。その違いを分かった上で話し合いをすべきなのに、「どうしてお前は俺たちのことが分からないんだ」となって、話し合いが成立しなかったわけです。その極めつけが東方パートナーシップです。簡単にいうと、旧ソ連の国に対して、もっとヨーロッパに近づけと促すもので、近づいてくればもっと支援するよ、というような枠組みです。ロシアからすれば、国境外ではあるけれど、自分たちの国境に侵略してきたように理解してしまうわけです。その違いが全然分かっていないのです。

冒頭で言いましたように、EU学会とロシア東欧学会は十分な対話がなされていませんし、そもそも十分な相互理解が成立しないのではないかと、私は感じています。それだけになおさら、ウクライナ戦争の遠因、背景として、ロシアを知っておかなければいけないと思います。ただ、それらは英語情報だけでは見えてこない部分ではあります。

二択では把握しきれない多民族国家

飯島 先ほど山田先生から「多様な人たちが意外に多い」との報告をいただきましたが、ロシアの領土拡大と政治経済に与える影響はどれくらいだと考えればいいのでしょうか。

蓮見 良くも悪くも多民族国家ということで、影響は大きいと思います。例えば、ソ連という国は一つの強権的な独裁国家というイメージがあるかもしれませんが、実際には地域ごとのボスの集まりのようなところがあったのです。90年代はそれが露骨になって混乱が起きましたけれども、それはいまだにあります。それから当然、ブリヤート・モンゴルやタタールスタン共和国など、いろいろなところがあるわけです。これはロシ

アに限ったことではありませんが、特に多民族のロシアにおいては、山田先生がおっしゃったように、いろいろな過去の文化が混ざり合い、重層しながら現在の文化や社会の基盤が作られています。そのような基層社会があることは理解しなければいけないと思います。

ロシア研究をやめた人間が言う「違う」と言われるかもしれませんが、ロシア的な世界は、「あれかこれか」という二択では把握できない部分があり、「あれもこれも」と包み込むような文化の構造があると理解した方がいいと思います。EUのロシアへの対応は、「EUを選ぶのか、ロシアを選ぶのか」や「民主主義か、それとも独裁を選ぶのか」という感じですが、二択を迫られてもうまく対応できないのです。ましてや、ウクライナの3分の1くらいはロシア語話者だったのです。今でもいますし、ゼレンスキー氏も少し前まではほぼロシア語を話していたわけですから。そのような文化の構造のところには二択を迫るのは、大きな問題があるのではないかと私は思っています。世界経済も本当に多極化しているので、今まで以上にいろいろな人たちとお付き合いしていかなければならない時に、二択を迫るようなアプローチは時代にそぐわないと考えています。

河本 おそらくヨーロッパは二択を迫っているつもりはなくて、そこが非常に厄介だなと思っています。

ぜひお伺いしたいのですが、「ロシアの安全保障観がヨーロッパで理解されない」という面は確かにあると思います。ただ、隣の国が友好的であることを求めるのは、ヨーロッパの発想でも理解されていいような気もしますが、それも駄目なのでしょうか。例えば「ウクライナがロシアを嫌いと言っているのだから嫌わせてやれ」という方向にしか話はいかないものなのでしょうか。

蓮見 ご存じの通り、ウクライナという国は、独立はしたけれども国民国家として完全に成立してはいなかった国です。そこはやはり大きな問題点だと思います。もともと分裂を抱えているところに二択を迫ると、西側の3分の1くらいは「EUがいい、ロシアは嫌い」となります。そのまま政権が成立すると、ロシア語話者の3分の1は打ち捨てられてしまいます。EUが好きでロシアが好きな人が、なんとか妥協できるような国民意識の形成がなされればよかったのですが、それに失敗した国です。

それから、旧共産圏の中でも豊かなポテンシャルがあり、教育水準も高いのに、全く経済発展ができなかった国でもあります。戦争でひどい目にあってウクライナの問題点を指摘するのは酷かもしれませんが、ウクライナ自身の問題があると思います。私は2014年頃、「ウクライナは大人にならないといけない」と、よく言っていました。確かにスラブ世界の源流であって偉いかもしれませんが、やはり自分たちの現在の力や能力に合った形で、EUともロシアともほどほどの距離感を持ってお付き合いをするべきではないか、とずっと言ってきました。でも、そうならなかったということです。何度も言いますが、世の中は本当に多極化しています。日本にしても「ア

アメリカに協力します」という一本槍で、世界の国々とお付き合いできるわけではありません。そういう意味では、ウクライナを一つの教訓として考えなければならぬと思います。

こちらに『地図で見るロシアハンドブック』（原書房）という本があります。日本ではあまり知られていませんが、ヨーロッパの研究の世界では、経済地理はものすごくレベルが高く、重要な分野で、その研究者たちの発想がここに書かれています。この本の旧版に「欧米とロシアの間には無理解の壁があり、厄災を招く誤解があらゆる領域にわたっている」ということが書かれています。これを見た時に、先ほどお話しした私の気持ちとぴったりで驚きました。そして、つくづく思ったのは、英語を媒介としたロシア情報だけでは、いつの間にかフィルターがかかってしまっていて、無理解の壁や誤解をそのまま取り込んでしまうということです。

フィルターがかかった情報を輸入してしまうと、ますますもってロシアのことが分からなくなってしまいます。最近、ロシア経済のことを書く機会があり、中国とロシアの関係について書かれた論文を読みました。ロシア語と英語、それから日本語に訳したものがあ、三つを読み比べてみると、機械翻訳としては間違いではありませんが、それぞれニュアンスが異なっていました。「安全保障」「正義」「民主主義」などの同じ言葉を使っても、そこに含まれるニュアンスは文化によって異なるわけです。そういうところは英語だけでは読み取れないので、結果的に相手に対する誤解を増幅させてしまいます。ロシア語に限りませんが、同じ現象に対する情報を違う言語で読むことは絶対に必要で、そうでなければ、多極化の時代に対応できないというのが私の認識です。そのためには、第二外国語は絶対にやっておかなければいけないと思っています。

飯島 英語文献を読んで「国際的な状況を理解した」と考えることの危うさをご指摘いただいたのではないかと思うのですが、併せて例えばロシアを理解しようとしたとき、当該言語と、その言語が持つ歴史的文化的背景も理解することが重要と理解しました。そのあたりの重要性について山田先生はいかがでしょう。

山田 重要性というか、ロシア語はやはり違うな、と感じることはよくあります。ヨーロッパ人からするとロシアは全然分からない国ですし、日本人やアジア系の人たちがロシアのことを分かるかといえば、そうでもありません。ロシア人自体も、自分がヨーロッパ人なのか、それともアジアの方なのか、よく分かっていないところがあると昔から言われています。

言語的にも、お茶のことを日本語では「おちゃ」や「ちゃ」と言い、ヨーロッパでは「ティー」と言います。「ちゃ」と「ティー」に分かれるわけですが、ロシア語でお茶は「チャイ」と言いますので「おちゃ」派です。ロシアは東ヨーロッパのさらに東ですから、ヨーロッパ言語の割にはアジアからの影響を強く受けています。アジアとヨーロッパの両方の要素が入っていることで非常に理解しづらいというのは、その通りかなと思って

います。

そういったロシアが今後どうなっていくのか、あるいは経済的に見るとどうなのかということですが、GDPで見ると低いかもしれませんが、あれだけ大きな国ですし、今後も影響力は大きいと思います。農業大国で、例えば蕎麦や小麦などの生産量は世界1位、2位です。そのような話をすると、学生から「そうなの？寒い国だからそんな生産力があるなんて知らなかった」といった反応があります。そのような話がいろいろと出てくる国でもあり、日本人にとっては、もっと知っておくべき国なのだろうと、常日頃から感じています。

ロシアへの誤解と求められる情報のアップデート

飯島 私が冒頭で話した相互の「誤解」がロシアの考え方を理解することを妨げているという側面もあるのかと思います。今、あるいはこれからのロシアを考える上で、その誤解は解いておいた方がいい、この部分の情報をアップデートして考えていった方がいいという重要な点があれば、それぞれの分野から教えてください。

河本 政治的なところでいうと、強権支配なのはその通りですが、同時に支持もあることは押さえておいた方がいいと思います。「プロパガンダによって有権者が騙されているんだ」というのも、話半分に聞いておいた方がいいです。プロパガンダ自体は、ソ連時代から皆さん慣れっこなので、その行間を読む術はよく心得ています。特にソ連時代を経験した人には、読みすぎておかしいときがあるくらいに、裏を読むことが習性として根付いていると思います。報道があてにならないことくらいご承知なので、騙されて踊らされているというのは、ロシアの人々をみくびる態度であると考えた方がいいと思います。

もう一つ、日本において、ロシアに対する誤解うんぬんというときの問題が、今の戦争の背景にあります。「プーチン氏が言っていることは実はこういうことであって、巷間言われているような内容ではない」などと言うと、「あなたは親ロシア派ですね」と言われがちです。これは非常に損をします。専門家が真摯に言っていることなのか、扇動家がいい加減なことを言っているのかを見極める必要があるわけです。私も「ロシア擁護に思えることを言っているからロシア擁護派だ」と言われた経験があって、大変心外でした。「ロシアの事情をロシアの人が発信するとこのようになって、ロシア語でこう表現されているのです」ということを、もう少し淡々と受け止めてほしいという希望はあります。政治的な「ロシアは敵だ」というマインドセットが理解を妨げているところはあると思います。

蓮見 一つは、経済制裁でロシアは苦しくて、もうすぐ崩壊すると盛んに言われていますが、実はロシア経済は絶好調です。もちろん、住宅バブルや経済の軍事化などいろいろ

ろな問題があるのは事実ですけれども、それほどやわな経済ではありません。地力があり、資源も豊富な国ですから。

もう一つ、先ほどから強調しているように多極化なので、このような状況でもロシアと普通にお付き合いをする国はたくさんあります。二択的な思考で「ロシアは悪い」と制裁をかけているにもかかわらず、多極化の現実がロシアを助けているわけです。ですから、もう少し冷静にロシア経済をみるべきです。河本先生がおっしゃった通り、今ロシアで何が起きているのかを、事実に基づいて知ることが一番大事だと思います。

ある文化人類学者が「われわれは分からないことに耐えられなくなっている」とおっしゃっていました。分からないので、とりあえずロシアが悪だとしておけば、なんとなく安心できるわけです。ですが、ロシアに限らず、まず分からないことを認めた上で、分かるためには何を知らなければならないかを考えることが、とても大事だと思います。

山田 民衆文化などの調査に行く自分からすると、一般的なロシア人の考え方は、英語でもロシア語でもメディア上に出てくることはないだろうと思います。先ほど河本先生もおっしゃっていましたが、そこまで仲が良くないのに政治的な意見を正直に言う人は、おそらくロシアにはいないと思います。何があるか分からないので、絶対に隠してしまいます。例えば、中国のことがあまり好きではないというロシア人はかなり多いです。日本についても「好感を持っている」とのアンケート結果が出たりしますが、実際にロシアの村に行くと「北方領土のことをニュースで読んだから日本人は好きではなくなった」と話すおばあさんもいます。一般的な人の考え方を捉えるときに、ニュースが全てだと考えないでほしいとの思いはあります。

また、伝統文化や歴史的なものに対するロシア人の捉え方としては、昔から被害者意識が強いです。今のウクライナ侵攻に関しても、日本人を含め外国人からすると、ロシアは侵略国家で、独裁的で、強欲だというイメージがあると思います。しかし、ロシア人は被害者意識を持っていて、「やりたくはないけれど、そうせざるを得ないところまで追い詰められたからやらなきゃいけないのだ」と本気で思っている人がかなり多いと思います。単にプロパガンダやこじつけだと思わず、本当にそう思っているのではないか、というところから捉え直すことも必要だと思います。

これからのロシアを学ぶことの面白さと意義

飯島 先生方のお話に共通するご指摘で重要なことは、「誤解」や「知らなかった」というポイントを踏まえつつ、「冷静に分析し、ロシアを知る必要がある」ということだと思います。これから先入観というフィルターを外し、二者択一の議論に陥らずにきちんと見ていくとすると、今からのロシア、あるいはわれわれにとってのロシアのどういうところが見えてきて、ロシアを学ぶことの面白さや意義が見出せるのでしょうか。最後になりますが簡単に教えてください。

河本 私は「世界の中のロシア」を担当していますので、ロシアの情報を一生懸命話しています。その際、われわれとは別の国ですので違うところがたくさんありますと強調しています。まずは、われわれが常識だと思っていることが常識ではない世界があるということを理解してもらう必要があるので、そこには意を払っています。

その上で、案外似たところもあると伝えなければならないと思っています。異星人が住んでいるわけではなく、人間として同じように感情を持っている普通の人たちが住んでいるのであって、強権支配が大好きという人は当然まれなわけです。しかしながら、いろいろな事情で与党やプーチンを支持している人たちもいるわけです。単一の理由でプーチン支持である、もしくはプーチン支持でないという話ではなく、日常生活から発する経済的、あるいは職業上の利害から絡め取られる形で生活しているのです。ですから、われわれとあまり変わらないのですよということはメッセージとして伝えるようにしています。お答えになっているか分かりませんが、「違うということを理解した上での共通性」みたいなものに私は意を払っています。

蓮見 世界経済から見たときに、ロシアはとても面白い国です。そのあたりのことも含めて『世界経済の鏡としてのロシア』という本を書き進めているのですが、ロシアの面白さは二つあると考えています。

一つは、先ほどからお話ししているように、世界経済の中心が大西洋から太平洋・アジアに移ってきているという傾向です。その中でウクライナ戦争と経済制裁の件もあり、好むと好まざるとにかかわらず、ロシアは、アジアの国々、中国やインドと協力せざるを得なくなっています。まさにこれが世界経済のパワーシフトの鏡です。

もう一つは、意外なことに脱炭素です。ロシアは化石燃料大国です。差し当たってアジア向けに化石燃料を売っていますけれども、これからは脱炭素に対応せざるを得なくなっていくと思います。「油上の楼閣」などと言う人もいますが、石油に頼ってきた国が、これから脱炭素時代にどう対応するかを観察するのはとても面白いと思います。本当に対応できるのかどうかは分かりませんが、まさに時代の最先端の脱炭素の問題とロシアは深く関わってくると思います。

山田 ロシアは、昔から日本で知られている国ですけれど、「謎な国」でもあります。どのような国が知られていないという意味では、これから関係性を築いていく上で、知るべきことは多いと思います。その割にロシアについて英語や日本語で情報発信できる人は非常に少なく、圧倒的に数が足りていません。しかも、ウクライナ侵攻を受けてからはさらに減っています。希少な価値があるという意味でも、今こそロシアを学ぶ意義があるのではないかと考えています。

河本 戦略的にロシアを勉強する人を育て、ロシアの人々を引き込み、ロシアの中に日本の味方を増やしていくというのは、あっていい方向性だと思います。ただし、お金が

必要だとか、人が必要だとかの事情で、見込みはそれほど明るくないかもしれません。しかし、日本の外交戦略、いわゆるハイポリティクスのなレベルで考えても、敵だからこそ勉強し、味方に引き込む人をできるだけ増やすことは考えるべきだと思います。

蓮見 河本先生がおっしゃったように、敵だとすればもっと研究しなければいけません。例えば、ロシアと戦争して領土を奪われたフィンランドでは、ロシア経済の研究がものすごく進んでいて、役に立つレポートがたくさんあります。一方、日本では、こうした情報は限られています。ですから「フィンランドに学べ」というところもあると思います。

飯島 冒頭で触れたように、われわれは、よく分からないので最初に抱いたイメージや固定観念を持ち続け、善悪あるいは敵味方という見方をしてしまいがちです。ロシアに限らず、どの国に対してもそのようなレッテルを外し、バイアスがかからないような形できちんと学んでいくことが、これからグローバル化が進んでいく中でわれわれに求められることではないかと思います。

それでは、本日はこれで終わりたいと思います。長い時間ありがとうございました。